

チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の『鐘の音』(*The Chimes*, 1844)は、『クリスマス・ブックス』の二作目に当たる中編小説である。¹ディケンズ自身書簡の中で「大成功を収めた」²と述べているように、『鐘の音』は、発表当時こそ多くの読者を獲得したが、現在では『クリスマス・キャロル』は例外として、『クリスマス・ブックス』に収められた他の作品と同様、それほど広く読まれてはいないし、またディケンズ研究者の間で必ずしも高い評価を受けてきたわけでもない。何よりも先行研究の少なさがそのことを如実に物語っているのだが、その原因はどこにあると考えられるか。アンガス・ウィルソン(Angus Wilson)は『鐘の音』は『クリスマス・ブックス』の中で「最も成功した」と評しているが、それはあくまでも『クリスマス・ブックス』の中で一番ということであり、ウィルソンは「中編小説の長さは短編小説同様、ディケンズには適していない」とも述べて、ディケンズが短編小説や中編小説には向かない作家であったことを認めている。³恐らく『鐘の音』の評価が低い一番の理由はここにあると思われる。確かにディケンズの作家としての本領が発揮されるのは長編小説においてであることに異論を挟む者はいないであろうし、多くの読者が短編や中編よりも長編小説にディケンズの作家としての魅力を感じるであろうことも想像できる。そのため、『クリスマス・ブックス』に収められた作品は、他の長編小説ほど読み継がれてはこなかったと考えられる。

一方、少ないながらもこの作品を積極的に評価する研究者の間では、『鐘の音』に後期作品の萌芽が見出せるという点で、見解がほぼ一致している。すなわち、『鐘の音』で描かれる当時の社会風刺的要素が、ディケンズの後期作品において顕著となる社会批判として実を結ぶという見解である。⁴しかし、この点以外にこの作品を肯定的に評価できる要素は見当たらないようだ。

そんな中で『鐘の音』を積極的に擁護しているのがマリリン・J. クラタ(Marilyn J. Kurata)である。クラタは他の批評家同様、社会批判としての『鐘の音』に注目する一方、それだけにとどまらず、「『鐘の音』はディケンズの最も入念に構成された作品のうちの一つである」⁵とも述べて、この作品の構成も高く評価している。私もクラタと同様、『鐘の音』の構成を評価する立場である。もちろん、『鐘の音』がディケンズの傑作と見なすには無理がある。しかし、四つの章に分かれるこの作品のそれぞれの章の枠組みと他の章との関係、とりわけ主人公のトビー・ヴェック(Toby Veck)を初めとした貧しい者の虐げられた生活と彼らとは大きな隔たりがある市参事会員のキュート(Cute)や国会議員のジョウゼフ・ボウリー(Joseph Bowley)といった為政者が紹介される前半2章の現実の世界と、トビーの見た夢が描かれる後半2章の夢の世界という二つの世界のコントラストは、一考に

値する。本論ではこの枠組みの意義を中心に、『鐘の音』の構成について考えてみたい。

まずは前半2章と後半2章のそれぞれを概観してみる。前半の2章は主人公のトビー・ヴェックが、貧しい労働者の存在価値に疑問を抱き、人間に対する信頼を見失うまでの過程を中心に展開する。トビー、またはトロティ(Trotty)と呼ばれる老人は、ロンドンで公認荷物運搬人をしている。仕事にはあまり恵まれず、特に風の強い日や霜が降り、雪やあられの舞う寒い日は、彼にとっては「祝日」(96)であったと語られるが、これはそういった天気の日が楽しい休日のようなのではなく、ただ単にそういう日には仕事にありつけないことを意味する。しかし、トビーはどんなに悪天候であっても、教会の前で仕事の依頼が来るのを待っている。そして彼はそこの教会の鐘に親近感を抱いていた。どれほど風に打たれようとも、それに負けずに強くたくましく鳴り響く鐘と自分の孤独を重ね合わせるのである。そしてトビーは鐘の音が自分の名を呼んでいるような印象まで持つ。無論、これは鐘に愛着を感じたトビーの無邪気な解釈であるが、トビーがどんな時にどんな声を鐘の音の中に聞きだすかが、物語の展開の鍵となる。と言うのも、後述するように、鐘の声の変化は、トビーの心情の変化を反映したものだからだ。

時は大晦日、トビーはいつものように仕事に来るのを待っていた。トビーは、自分のような貧しい者がこの世で生きる価値があるかどうかという疑問を漠然と持っていたが、彼にそのような懐疑心を抱かせた主たる根源の一つとして新聞記事がある。ポケットに入っている新聞を手にとりトビーは「新聞にはぞっとさせられるよ。わたしら貧乏人はどうなるのか分かったもんじゃない」(100)と語る。新聞で報じられる貧民に関する記事を読み、貧民を悪とする新聞の言説をトビーは鵜呑みにしてしまうのである。さらにトビーは「わたしらがこの地上で何か用があるのかどうかなんて、わたしには分からん」、「わたしらに何かいいところがあるのか、それともわたしらは生まれながらに悪いのか、結論を下すこともできんよ」(101)と言って、深く考え込んでしまう。ここで娘のメグ(Meg)に声をかけられ、トビーは我に返り、「わたしらはここでいくらかは用があるみたいだ　少しはな！」(101)と呟く。「美しく、混じり気がなく、希望で輝いた」(101)メグの目を見て、懐疑へと揺らぎかけていたトビーは、メグの中に人生の意義を少しは見出すのである。

メグは、ここ1週間ほど仕事がなく、まともな食事をとっていないトビーに、労働者にとってご馳走であるドライブと呼ばれる料理を届けにやって来た。さらにメグは翌日、年が明けたらすぐに鍛冶屋のリチャード(Richard)と結婚する旨をトビーに報告する。幸福感に浸って、とある邸宅の石段でドライブを食べていると、突然その家の扉が開き、従僕に続いて市参事会員のキュート、経済学者のファイラー(Filer)、そして名は述べられないが赤い顔が特徴の紳士が出てきた。不経済な料理であるドライブを食べているトビーは泥棒だと詭弁を弄するファイラーや、いつの時代かは言及せずに何度も「古きよき時代(the

good old times)」(110)という言葉を目にし、今の時代を嘆く赤ら顔の紳士に非難されたことで、トビーは自分の不安は「十分根拠がある」(111)と感じ、「わたしらにはいいところは全くない。わたしらは生まれながらに悪いのだ！」(111)と考えるに至る。キュートたちは、貧しい者は生まれながらに悪いのだとトビーを洗脳しようし、一方トビーは、それに反論できずに、その言説を受け入れてしまうのである。彼らは続けてメグとリチャードにまで説教をし、二人のような貧しい者は結婚すべきではない、仮に結婚したら不幸な結末が待っているだけだと諭す。さらにキュートは、最後には川に身投げしたり、首を吊ったりする母親がいるが、「私は自殺を一切禁止すると決めたのだ」(115)とメグに警告する。この「禁止する(Put Down)」という言葉を繰り返す口にするように、キュートは貧民を徹底的に抑圧する人物なのである。

意気消沈したトビーは、鐘の音が変化したことに気付き、「わたしは新年にも旧年にも用はない。死なせてくれよ！」(117)と語る。ここが鐘の音の最初の変化である。鐘の音はこれまでのようにトビーを励ましてくれるものではなく、トビーの耳には「禁止せよ、禁止せよ！古きよき時代、古きよき時代！事実と数字、事実と数字！」(117)とキュートたちの言葉を連呼しているように聞こえた。もちろん鐘の音は変わらずに、いつものように鳴り響いていただけだ。変化したのはトビーの意識である。鐘の音の変化は、トビーの心情の変化、心の揺れを反映したものであり、トビーの心にキュートらの言葉が強く残り、トビーが彼らの考えを受け入れる方向に傾いていることを暗示している。

キュートから言付かった手紙を持って、トビーは国会議員のボウリー宅へと向かう。ボウリーは、自分は「貧しい者の友」(122)だと公言しているが、実際には貧者の無知に付け込んでいるだけである。彼は恩着せがましく「君はわざわざ自分で考える必要などないのだよ。私が君に代わって考えてあげよう」(122)と語る。さらにボウリーは、貧民に必要なものは「全面的に私に依存すること」(124)だと主張する。これらの言葉に、貧民をうまく騙しこむボウリーのしたたかさが表われている。自分が貧しい者に代わって全てをしてあげようとして、その実は、貧者に考えさせない、何もやらせないことで、彼は自分の思い通りに貧民を都合よく利用し、搾取しているだけなのだ。トビーは自分の無知を自覚しているが、ボウリーにとっても、貧民が無知でいる方が好都合なのである。当然、トビーはボウリーのこのような策略を見抜くことができず、むしろボウリーの言葉に感動すらする。また、自分に借金があることをボウリーに責められたこともあり、トビーは「自分のような者には新年は決して来ないだろうことをこれまで以上に確信する」⁶のである。

キュートからボウリーに宛てられた手紙の内容は、ウィル・ファーン(Will Fern)という労働者を拘留すべきかどうかボウリーに意見を求めるものであった。貧しい者の友であれば、重い罪を犯したわけでもないファーンに味方して当然なのだが、ボウリーはファーンを拘留することに同意する。ボウリーが貧者の友ではないことがトビーの目の前で明らかになるのだが、トビーはボウリーの言葉と貧しい者に対するボウリーの実際の態度の矛盾

に気付かずに、自分の抱いた確信を強くしただけであった。

ボウリーの家を出たトビーは鐘の前を通っても、いつものように鐘を見上げることをしなかった。鐘に親近感を抱いていたトビーであったが、先の変化に続き、鐘の音が今度は何を言いたすのかを恐れたのであった。トビーが鐘に背を向けた瞬間である。帰宅途中でトビーはウィル・ファーンに偶然出くわす。ファーンは両親を失った姪のリリアン(Lilian)を連れていた。二人はリリアンの母親の友人を頼ってロンドンに出てきたのであった。トビーは、キュートに会いに行かないようにとファーンに警告を与え、さらに今晚は自分の家に泊まるようファーンに勧める。ファーンは自分が陥った苦境をトビーに打ち明けるが、それに対して「彼はこの点で真実(the Truth)を語っていることをトビーは知っていた」(130)と語り手は言う。つまり、『鐘の音』においてファーンは労働者を代表する声であり、彼が語る労働者の窮状は真実として扱われているのだ。ファーンが「ディケンズの小説の中で重要性を持つ最初の労働者」⁷と評される所以である。

その夜、部屋に一人残ったトビーは新聞を手にする。そこで目にしたのは母親が子供と心中を図ったという記事であった。その恐ろしさにトビーは新聞を床に落とし、こう叫ぶ。

「惨い、酷すぎる！」トビーは叫んだ。「惨い、酷すぎる！心底悪い人、生まれながらに悪い人、この地上に用のない人以外にこんな行いはできやしない。今日聞いたことは全部本当だ。もっともなこと、証拠はたくさんある。わしらは悪いのだ！」(136)

貧しい母親が生活に困窮し、最後の手段として自殺を図るという内容は、先にキュートがメグに与えた警告を想起させる。そのためにその新聞記事は、自分がその日キュートたちから聞かされたことを立証するものとトビーは考えたのである。そしてトビーは、貧しい者は生まれながらに悪いという結論に達する。すると丁度その時、あたかもトビーに反論するかのように、鐘が鳴り出す。鐘の声はトビーを呼び出すものであった。幾分躊躇った後、トビーは意を決して教会に向かい、鐘楼へと上っていき、そこで気を失う。ここから、と言うよりも、実際には新聞を床に落として上に引用した叫びを発した直後からが、トビーの夢となる。

前半2章はトビーが疑念を抱き、鐘によって夢の世界へ導かれていくまでの過程が描かれていた。そして後半2章を構成するのがトビーの見た夢である。貧しい労働者は生まれながらに悪いというトビーの下した結論は果たして正しいのかどうか、夢の中で検証されることになるのだ。

気を失ったトビーは意識を取り戻すと、グロテスクな姿をした鐘の精たちを目にする。鐘の精は、トビーが鐘に対して犯した罪を指摘する。

「多くの悲しみを負った人々の希望、喜び、苦痛、悲しみに対する無関心、あるいは手厳しい関心を示す声を我々鐘の中に聞く者、人間がそのためにやつれ衰えることもある粗末な食べ物量を計るごとく、人間の熱情や愛情を計ろうとする主義に我々が答えるのを聞く者は、我々に不正を行っているのだ。その不正をお前は我々に行ったのだ！」

「そうです！」トロティは言った。「ああ、お許しを！」

「この地上の鈍感な害虫に我々が共鳴するのを聞く者、つまり、時代のそのような蛆虫たちが這い上がれるよりも、考えているよりも、高い地位に置かれるよう作られているのに、虐げられ打ちひしがれている人々に対して禁止を押しつける者たちに、我々が共鳴するのを聞く者は、我々に不正を行っているのだ。だから、お前は我々に不正を行ったのだ！」(145)

既述したように、鐘の音の調子が変わったことをトビーが意識するのは、トビーが疑念を抱いてからであり、鐘の音の変化はトビーの意識の変化を反映している。つまり、鐘の音が何を言うかは、聞く側、すなわちトビーの解釈で決まる。鐘の精はその点を、つまり、鐘が口にするとトビーが思ったこと、およびそのために鐘を恐れたトビーの鐘への不敬を非難しているのだ。トビーは「知らなかったのです。そんなつもりではなかったのです！」(145)と弁明するが、聞き入れられない。そして鐘の精から「彼女の生活から生きた真実を学ぶのだ。最愛の者から、悪人は生まれながらにどれほど悪いのか学ぶのだ」(146)と命じられる。鐘は、最愛の娘メグがどのような運命を辿るのかをトビーに示すことで、貧民は生まれながらに悪いというトビーの考えを正していこうとするのだ。

最初にトビーは、鐘楼から転落して死んだ自分の姿を見せられる。貧民の存在意義に疑問を差し挟んだトビーの「死なせてくれ」という願いが聞き入れられたということであろうか、トビーは夢の世界では存在を消されているのである。夢ではそれから9年後の世界が提示される。まずメグが登場する。彼女はリアンと二人でみすばらしい部屋で刺繍仕事に励んでいた。しかし、メグと結婚するはずだったリチャードの姿は見当たらない。それから場面はボウリー夫人の誕生日パーティに移る。ここでボウリーやキュートの実態がトビーの目に改めて晒されることになる。銀行家が自殺をしたという知らせが届いた時、キュートは貧民には自殺を禁ずると言っておきながら、自殺したこの銀行家を非難することはせず、ただその死を嘆くだけであった。同じ自殺であっても、抑圧されるのは貧民だけという不合理が露見するのである。一方ボウリーは、相変わらず自分は貧しい者の友だと吹聴しているが、貧民の代表たるファーンが現われて労働者の窮状を訴えると、ボウリーは彼をはねつけてしまう。この時ファーンは「この一度だけ語られる本当の真実(the real Truth)を聞いてくれ」(154)と懇願する。先に述べたように、ファーンは真実を語る人物であり、そのファーンがボウリーやキュートに真実を訴えるということは、彼らの説くこと

は真実ではないことを暗示している。そしてボウリーやキュートラが為政者の偽りの姿を徹底的に暴くこのような辛辣な描写に、冒頭で述べた後期小説へとつながる社会批判的要素を見出すことができる。

貧しい者は生まれながらに悪であるというトビーの出した結論を例証するかのごとく、ファーン、リリアン、そしてリチャードは墮落していく。ファーンは何度も刑務所に入れられ、最後には放火犯となることが仄めかされる。大人になったリリアンはメグの元を離れて売春婦に成り下がり、最後にメグの元に帰ってきて息絶える。第1章においてキュートがトビーに「お前のあの娘に気をつけるのだ」(116)と警告する場面があり、貧しい女が売春婦となる潜在的危険を仄めかしているのだが、夢の世界ではメグではなくリリアンがその運命を辿る。リチャードがメグとすぐに結婚しなかったのは、貧しい者は結婚する資格がないという言説を彼が受け入れた結果であった。つまり、リチャードはトビーと同じく為政者たちに洗脳されたことになる。鐘の精はリチャードの姿を通して間接的にトビーに自分の過ちを示すのである。

一方メグは、リチャードに捨てられ、リリアンが去って一人になっても、貧困に耐えながら生き続ける。そして身を持ち崩したリチャードが戻ってくると、メグは彼と結婚する。しかし、リチャードはメグと幼い子を残して死んでしまう。家賃が払えずに下宿を追い出され、追いつめられたメグは我が子を抱いてテムズ川へと向かう。ここがトビーの夢の、さらにはこの物語のクライマックスである。トビーが貧民は悪であるという結論に至ったのは、我が子を危めて自殺未遂した母親の記事を読んだためであったが、夢の世界でメグは、トビーが戦慄を覚えたこの母親と同じ運命を辿ることになる。もし生まれながらに貧しい者が悪であるならば、トビーの希望であった最愛の娘メグも悪となってしまう。これはトビーの疑念から生まれた最悪の結末であった。鐘の精は、トビーに過ちを気付かせる一番効果的な方法として、子殺しの役をメグに担わせたのだ。トビーは貧民の人間としての存在価値を見失った自分の過ちを自覚し、「わたしの無礼、邪悪、無知を哀れんで、あの娘を救ってください」(178)と叫び、鐘に許しを請う。そして「わたしらは信頼して希望を持たなければならない、自分たちを疑うことも、お互いよい人間であることを疑うこともしてはならない、ということが分かりました」(178)と言ってトビーは信頼することの意味を悟る。ここで新年を告げる鐘、「いつもの聞き覚えのある鐘」(178)が高らかに鳴り響き、トビーは目を覚ます。当初の予定通りメグとリチャードは新年に結婚する。現実の世界から夢の世界に導かれ、その悪夢から覚めたトビーを待っていたのは、娘の結婚という幸福な現実であった。

以上見てきたように『鐘の音』は、前半は現実の世界、後半はトビーが見た夢の世界という枠組みから成り立っている。この二つの世界を比較してみると、現実の世界と夢の世

界は独立した別個のものではなく、密接な関係があることが分かる。夢の中に登場する人物は、既に前半2章で出てきた人物ばかりである。また、夢の中でメグやリチャード、ファーンらの身に起きたことは、貧民は生まれながらに悪であるという為政者や新聞の言説、そしてトビーが出した結論を具体化したものだ。つまり、後半の夢の世界は、前半2章で述べられた為政者や新聞の言説の延長線上にあると言える。それゆえに、夢の世界は、トビーには現実の世界と変わらない迫真性のある世界に感じられるのだ。

しかし、二つの世界は全く同質の世界ではない。現実の世界と夢の世界に登場する人物は共通しているが、その人物がそれぞれの世界で果たす役割は、全てが同じではないからだ。キュート、ファイラー、ボウリーらは現実の世界でも夢の世界でも貧しい者の敵となる人物、つまり、どちらの世界でも変わらぬ人物である。一方、メグ、リチャード、ファーンらはそうではない。『鐘の音』の中で彼らは「二重の役割(dual roles)」⁸を演じているのである。このような違いがあるのは何故か。ここでポイントとなるのが、この夢がどこから生じたものかという点である。夢の世界は、貧民は悪であるという前提のもとで、メグやリチャードといった貧しい者がどのような結末を迎えるかを鐘の精が示した世界である。ゆえに、夢の世界はトビーの出した結論が正しいと仮定した場合の未来であり、単なる未来ではない。つまり、トビーの夢は「彼自身の疑いと恐れへの反映に過ぎず、予言ではない」。⁹この夢は、トビーの懐疑心から生じたものであり、確実に起こり得る未来を予言するものではないのだ。それゆえ、夢の中の彼らは、貧しい者は生まれながらに悪いというトビーの疑念を前提とした場合の仮の姿であり、現実の世界の彼らとは異なっているのである。

メグやリチャードが夢の中では仮の姿であることは、彼らが現実の世界ではトビーと違って疑念を抱くことがなく、人間に対する信頼を失わなかった人物であることを意味する。それを象徴するのが、メグとリチャードの結婚である。この二人の結婚は、貧しい者は結婚する資格がないと二人に説教したキュートに惑わされずに、お互いに対する信頼を失わなかった結果なのだ。

このように、夢の世界では、現実の世界で疑念を抱いたトビーは消され、トビーを惑わした為政者たちは現実の世界と変わらぬ貧民の敵として、信頼を失わなかったメグたちは現実とは異なる人物としてトビーの前に現われ、トビーを改心させることに一役買うのである。

こうしてトビーの過ちは鐘によって正された。しかし、こう述べるとトビーに全面的な非があったように思われるが、そうではない。精に導かれた夢の中で仮定の未来を示し、主人公を改心させるという構造は『クリスマス・キャロル』と同じである。しかし、スクルージ(Scrooge)のような悪をトビーの中に見出すことはできない。確かに『鐘の音』は、トビーが人間に対する信頼を失い、鐘によって正される構成となっている。しかし、トビーが新聞記事を読んで自分たちは生まれながらに悪いと誤解したのは、「大部分はこの物語

の前半に数多く出てくる誤った教師たちの結果」¹⁰である。ゆえに、非難されるべきはトビーではなく、トビーにそのような過ちを犯させる原因となった言説を振りまく為政者や新聞なのだ。トビーが夢から目覚めた直後に年が明け、メグとリチャードが結婚することによって、トビーの夢の実現は、即座に否定された。そのトビーの夢は彼の疑念を具現化したものだが、その疑念を彼に抱かせたのは、新聞記事や為政者が彼に言ったことである。ゆえに、その夢の世界を否定することは、トビーの抱いた疑念を否定するだけでなく、疑念を生み出した新聞や為政者が説く貧者は生まれながらに悪いという現実の世界に蔓延する言説を厳しく批判することにもなるのだ。

このように、『鐘の音』は現実の世界と夢の世界という枠組みから成り立ち、夢の世界は現実の世界から派生したものである。そして夢の世界の実現を否定することで、トビーの疑いを生じさせた為政者や新聞の言説を批判する構図になっている。現実の世界と夢の世界という枠組みの意義はここにあるのだが、この物語の語り手は最後に現実と夢の枠組みに関して次のように述べる。

トロティは夢を見ていたのであろうか？あるいは彼の喜びと悲しみ、そしてその中の役者たちはただの夢、彼自身も夢で、この物語の語り手は夢を見て、今日が覚めたのだろうか？もしそうだとしたら、ああ、彼が見た幻の中で彼に親しくしてくれた聞き手の皆さん、これらの影を生み出した厳しい現実を忘れないよう心がけてください。そして皆さんの領域において そのような目的のためには広すぎることも狭すぎることもありません その影を正し、改良し、和らげるよう努めてください。(182)

ここで語り手は、トビーたちの生きる現実の世界と彼が見た夢の世界というこの作品を構成してきた二つの枠組みを取り払ってしまう。そればかりか、トビーや他の登場人物、さらにはこの物語そのものも語り手の夢であり、実際には存在しなかったかのように扱う。これはどういうことか。トビーは現実の世界から夢の世界へ行き、そして最後に現実の世界に戻ってきた。つまり、この物語の中でトビーは「現実の世界」「夢の世界」「現実の世界」と移動する。そして読者もこの物語を読む行為を通してトビーと同じ行程を進むのである。読者は自分たちが生きている現実の世界からこの『鐘の音』という夢物語を読み、そして最後に再び現実に戻る。つまり、ここで語り手は読者に対してもこの物語と同じ枠組みを設けているのだ。そして読者が現実に戻る際に、語り手は読者に、トビーに真実を気付かせた鐘のごとく、警鐘を鳴らしているのである。夢は存在しなくとも、夢を生じさせた「厳しい現実」は確かに存在することを忘れることなく心に留めておくように、そしてこの現実を知った読者は、できる限りのことを尽くして欲しい、という警鐘を。そ

してこの最後に響く鐘の音ゆえに、『鐘の音』は「現状を正当化しようとする者への非常に厄介なプレゼント」¹¹となるのである。

註

- ¹ テクストとして Charles Dickens, *Christmas Books*, ed. Ruth Glancy (Oxford: Oxford UP, 1988)を用いた。本書からの引用は全て本文中に頁数を記す。なお『クリスマス・ブックス』とは、いずれもクリスマスの時期に発表された『クリスマス・キャロル』(*A Christmas Carol*, 1843)、『鐘の音』(*The Chimes*, 1844)、『炉辺のおおろぎ』(*The Cricket on the Hearth*, 1845)、『人生の戦い』(*The Battle of Life*, 1846)、『憑かれた男』(*The Haunted Man*, 1848)の5作を1852年に1冊にまとめた際につけられたタイトルである。
- ² Kathleen Tillotson, ed. *The Letters of Charles Dickens* vol. 4 (Oxford: Clarendon, 1977) 312.
- ³ Angus Wilson, *The World of Charles Dickens* (London: Martin Secker & Warburg, 1970) 181.
- ⁴ 例えばマイケル・シェルダンは、『鐘の音』は「1850年代のディケンズの偉大な社会小説の先駆け」と見なしうると述べている。Michael Shelden, “Dickens, “The Chimes” and the Anti-Corn Law Leagues,” *Victorian Studies* 25 (1982): 330.
- ⁵ Marilyn J. Kurata, “Fantasy and Realism: A Defense of *The Chimes*,” *Dickens Studies Annual* 13 (1984): 25.
- ⁶ Shelden 347.
- ⁷ Sheila M. Smith, “John Overs to Charles Dickens: A Working-Man’s Letter and its Implication,” *Victorian Studies* 18 (1974): 212.
- ⁸ Kurata 29.
- ⁹ Shelden 348.
- ¹⁰ Deborah A. Thomas, *Dickens and the Short Story* (Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1982) 42.
- ¹¹ Peter Ackroyd, *Dickens* (London: Sinclair-Stevenson, 1990) 443.

【出典】*Fortuna* (欧米言語文化学会) 第20号(2009年) 13-21頁